2021 年 9 月 19 日･佐土原キリスト教会･礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書 1 章 14～15 節
説教題：福音を信じなさい

7 月に熱海で土石流の災害が起こって、亡くなった方が 26 名、行方不明の方が 1 名いらっしゃるということです。被災地の方々の上に神様の慰めと励ましを心よりお祈り申し上げます。私は、三浦綾子さんの「『泥流地帯』という本を、森下辰衛先生が解説しておられる CD を良く聞いたのですが、今回の 130 件の家を呑み込む泥流型土石流の映像を見て、「泥流地帯」の舞台となった大正 15 年の大泥流の凄まじさを具体的に感じたような気がしました。

さて森下先生はお話の中で、初めに「泥流地帯」のテーマを一言で説明しておられます。「『苦難の中でこそ人生は豊かなのです』ということ、それが主題です」と言われるのです。なぜ「苦難の中でこそ人生が豊か」なのか、それは「苦難の中でこそ人は成長する」ということと繋がるようですが、今日はその話をする時間はありません。申し上げたいのは、主題が分かっていると、物語を読む時、いつもそこに帰れば内容が分かり易いということです。今日の箇所がそういう個所なのです。イエス様は、伝道生涯で結局何を言われたのか、私達は「マルコ 1 章 15 節」に帰ることによって、中心から外れずに「福音書」を読んで行くことが出来るのです。

洗礼を受けられたイエス様は、荒野のサタンの誘惑に勝利し、いよいよ「神を宣べ伝える公生涯」に入られました。この個所は、そのスタートに当たりイエス様が為さったこと、語られたことを記します。そしてこの短い個所は、申し上げたように、イエス様の教えの内容を短くまとめて示してくれ、そのことを通して私達に信仰の励ましを与えてくれるのです。

14～15 節の内、中心は 15 節のイエス様のメッセージです。「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」(15)。この言葉は 2 つに分けることが出来ます。前半の「時が満ち、神の国は近くなった」は「事実の報告」です。後半の「悔い改めて福音を信じなさい」は「呼びかけ」です。前半と後半に分けてお話しします。

1. 主が語られた「事実の報告」～「時が満ち、神の国は近づいた」

「時が満ちた」とはどういうことでしょうか。クリスマスに讃美する讃美歌 94 番は「久しく待ちにし、主よ、とく来たりて、み民のなわめを、解き放ちたまえ」と歌います。「霊的ななわめからの解放」の意味も歌われているのかも知れませんが…。イスラエルの人々は、絶えず諸外国に翻弄されました。紀元前 586 年にはバビロンによって、国は徹底的に破壊され、主だった人々は捕囚の民となって屈辱的な生活をしなければなりませんでした。その人々を支えたのは、聖書の言葉、預言者の言葉でした。イザヤのような預言者は、「神を待ち望め、神を待ち望め」と前もって励ましていました。もともと神に対する不信仰によって、自分達に滅びをもたらしたイスラエルの民でしたが、祈りの中で神に帰って行ったのです。そして聖書の言葉を希望に、神を待ち望み、神を呼んだのです。心あるイスラエルの人々皆が「どうか天から見下ろして下さい。どうか天を破って下って来て下さい」と祈り続けたのです。「詩篇 126 篇」に「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう」(詩篇 126:5)という言葉があります。彼らは、祈りを種のように蒔いて行ったのです。それは、バビロン捕囚から解放された後も同じでした。依然として、外国の勢力下、支配下に置かれました。人々は、神が御業を為して下さる新しい時代が来ることを待ち続けました。そのような事実を背景として、イエス様は「時が満ちた」と言われたのです。だからそれは「(ただ単に)ある程度の時間が過ぎた」ということではないのです。「あなた方の祈りに神が答えて下さる時が来た。神の時が来た」ということなのです。聖書の中に「すべての営みには時があ(り)…神のなさることは、すべて時にかなって美し

い」(伝道者 3:1,11)とありますが、神の時がある、それを祈りつつ待つことの大切さを教えられます。
　では、時が満ちて、どうなったのでしょうか。それが「神の国は近くなった{『神の国は近づいた』(新共同訳)}」ということです。「神の国は近づいた」、しかし例えば「メッセージ」という英語の聖書は「神の国はすでにここにある」と訳します。ギリシャ語原典を直訳すると「神の国は近づいた」ですが、学者によると、そこに含まれているニュアンスは「神の国はすでに来た」となるらしいです。なぜそのような曖昧な―(また複雑な)―言葉になるかというと、「神の国」というのは、「既に来ているけど、まだ完全には来ていない」、そういう性格のものだからです。第二次大戦の勝敗はノルマンディー上陸作戦で決まりました。連合軍の勝利は既に確定しました。しかし戦争はそれからまだ１年弱続きました。「もう来ている、しかしまだ完全には来ていない」、お役に立つ譬えなら良いですが…。
　では「既に来ている『神の国』」は、どのような形で来ているのでしょうか。イエス様の目の前にいる人々にとって「神の国」は、まず「イエス様において」来ていました。イエス様によって「神の裁き」ではなく「神の赦しと受け入れ」のメッセージが宣言されました。ある時、ミッション・スクールの高校生達と話をしたことがあります。彼女達は私が語った「ザアカイ」のメッセージで心を開いてくれたのですが、1 人の女の子が―(過去に何かあったのでしょう)―「過去のことを赦されたいと思っていたけど、最近その確信が与えられた」と嬉しそうに話してくれました。私も「赦されたい」と思ったことが、神様に本気になって近づくきっかけとなりました。イエス様は、その「神の赦し」のメッセージを語って下さいました。イエス様のメッセージを受け入れた人々の心に「神の国」がやって来たのです。「国」という言葉には「支配」という意味があります。その意味で「神の支配が来た」と言った方が分かり易いかも知れません。「支配」というと、窮屈な感じがありますが、それはむしろ「影響下(保護下)に入る」という意味です。その人々の心と体が「神の影響下に入る、保護下に入る」、そのような形で「神の国」がやって来たのです。そして、「神の国」は、神に服従する人の心に、さらに、徐々にやって来るのです。
　そのことを良く伝えてくれるのが、申し上げた「ザアカイの話」です。エリコの町の取税人の頭であったザアカイ。取税人ということで人々に差別され、毛嫌いされ、そうされればされるほど、心を頑なにして、人々にやり返すようにして強欲に税金を取り立てていたザアカイ。そのザアカイがイエス様に受け入れられた時、自分の間違いに気付く「柔らかい心」を持つことが出来ました。人々から不正に取り立てた税金を返して回るようになったと言われます。そうすることによって、彼は自分の本当の値打ちを自覚し、生きていることを心地よく思うようになったのです。自分の「生」を喜ぶことが出来るようになったザアカイは、イエス様が自分のような者を探し出し「神の影響下」に引き入れて下さったことを心から喜んだのです。ザアカイだけではない、病を治してもらった人、悪霊を追い出してもらった人、多くの人々の人生が、イエス様によって「神の影響下」に入ることによって変えられて行ったのです。「神の国」は、イエス様を受け入れた人々の心と体にやって来たのです。
　ベトナム戦争の有名な写真があります。燃える服を脱ぎ捨てて裸で逃げる少女の写真です。彼女はファン・ティー・キム・フックという方で、重度の火傷で助からないと判断されたところを、17 回の手術を受けて奇跡的に一命を取り留めました。しかし戦後も、火傷のおかげで苦しい日々を過ごしました。「自分をこんな目に遭わせた人達を同じように苦しませてやりたい」、そう思っていたのです。「自分の心を変えるか、憎悪の中で死ぬか、2 つに１つだった」と言っておられます。その彼女が、従妹を通して教会に導かれ、クリスマスの説教を聞いたのです。「赤子のイエス様が世に来られたのは、罪に苦しむ私達のために十字架に架かって死ぬためだったのです。イエス様を個人的に救い主と受け入れるとき、心には平安があたえられます」。彼女はイエス様を信じるのです。そして人生が変わるのです。憎しみが平安に変えられて行ったのです。今はカナダに住んでおられますが、彼女は言いま

す。「神様は私の人生に不可能と思われたことを可能にして下さいました。今は憎しみを感じません」。「神の影響下」で癒されたのです。私達を変える、支える「神の国」が確かに来ているのです。

目に見えない神を信じ、頼り、求めることは、ある人達から見ると愚かなことかも知れません。しかし、信じた者には、見えない神に頼り、神の中に希望を見る思いが与えられるのです。「神の国」が心に来ているからです。「神の影響下、神の保護下」に置かれるからです。

私達にも「神の国」は目には見えません。でもイエス様を信じ、受け入れることによって、目に見えない「神の国」に引き入れられて行くのです。そして、いつかはっきりと見える形で、イエス様が王として支配なさる時が来るのです。私達は、「神の国」が完全に来るのを見るのです。

2. 主が語られた「呼びかけ」～「悔い改めて福音を信じなさい」

イエス様の後半のメッセージが「(神の国が来ているから)―悔い改めて福音を信じなさい」ということです。神の国は、イエス様を信じる者に来ています。しかし私達には「イエス様は『あなたに神の国が来ている。だから悔い改めて福音―(「神が『わたし』を通してあなたの罪を赦し、あなたを受け入れて下さる」という良い知らせ)―を信じなさい』と言われるけれど、『神の国(保護下)』を生きている実感が持てない。神を遠くに感じる」ということはないでしょうか。「人生を導く 5 つの目的」という本は「神の臨在が感じられなくなる時が、最も厳しい信仰の試練の時だ」と言います。その時をどのように乗り越えれば良いのでしょうか。

初代教会の人々は―(ペテロも、パウロも)―キリスト教のメッセージを語りましたが、聖書学者によれば、彼らは、イエス様がここで語っておられるのと基本的に同じメッセージを語っているというのです。「悔い改めて福音を信じなさい」、「洗礼を受けて教会の仲間に入りなさい」と語りました。しかし「神の国が近づいた―(来ている)」が違うというのです。彼らは「神の国が来ている」とは言わず、「あなた達が十字架につけて殺したイエスを、神は甦らせて私達の王(主)とされた」と語ったのです。何を言っているかと言うと、人間は、寄って集ってイエス様を十字架につけて殺しました。しかし神は、そのイエスを甦らせなさいました。神は人間の悪意をひっくり返して、ご自分の業を為さったのです。十字架と復活によって、私達に天国への道を備えて下さったのです。そのことを「神の国が来ている」という言葉の代わりに語っているというのです。

それはどういうことかというと、私達は、この世の様々な事柄に翻弄されながら生きています。人間的に考えれば否定的にしか考えられないような状況もあります。生きて行くのは大変です。しかし弟子達も、身の回りに起こる出来事に翻弄されながら生きたのです。いつも、いつも不思議なことが起こったわけではないでしょう。神の助けがないように感じることもあったはずです。しかしその時、彼らは「人の悪が十字架につけてしまったイエス様を、神様は甦らせた。神は悪の業をひっくり返された」、その事実に帰って行ったのです。「もう全ては終わった。どこにも希望はない」と思っていたのに、それを神は、「終わり」ではなくて「始まり」にしてしまわれたのです。(「AD」というドラマは、イエス様の十字架の場面から始まるのですが、画面の下に「始まり」という文字が出るのです)。その事実によって「神の支配は来ている」ということを確認したのです。だから「イエス様の復活」を語ることによって「神の国」の現実を語ったのです。ということは私達も、信仰が弱ってしまう時、「神は人間の業をひっくり返して御業をなさった」、「『終わった』と思えることを『祝福の始まり』にしてしまわれた」。その事実を思い巡らすことによって、「いや、確かに『神の国』は来ている」ということをもう一度確認出来るのです。

いずれにしても「神の国は来ている」、だからこそ「悔い改めて福音―(『神が「わたし」を通してあなたの罪を赦し、あなたを受け入れて下さる』という良い知らせ)―を信じなさい」と、主は言われ

るのです。「悔い改める」とは、「神に戻ること」です。私達は「神様、あなたがいるのならどうしてこうなのですか…」と神を試みる時があります。災害で多くの方が苦しむような時も、私達はそれを感じます。試練に遭う時、信仰が空しく感じる感じられる時があるのではないでしょうか。私にもあります。しかしイエス様は「悔い改めなさい—(神の許に戻りなさい)」と言われます。結論から言えば、私達にとって唯一、収まるところに収まって、前を向いて歩いて行けるのは—(あの放蕩息子が父の許に帰って、父の愛の中でこそ、ようやく祝福の生き方が出来たように)—神の前に謙って、神に祈って行く時ではないでしょうか。結局それ以外に良い解決の道はないのです。それはイスラエルの民も経験したことでした。私達を立ち上がらせるのは、いつも、神のところに帰り、身を低くして、神を見上げる時です。だからイエス様は、私達に—(時に神への信頼を失うようなことのあるような私達に)—「神の許に帰りなさい、あなたに『神の国が来ている』という私のメッセージを受け取り直しなさい、神の許で、神の赦しと愛、力と不思議を信じて生きて行きなさい」と言われるのです。私達は、絶えず神の許に立ち帰ることによって、「神の国(保護下)」の祝福に与りながら、歩みを進めることが出来るのです。

そして私は、イエスがガリラヤで宣教を始めて下さったことの中に慰めを見出します。なぜ首都エルサレムではなかったのか。クリスマスに私達は「イザヤ 9 章」を読みます。「しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる…異邦人のガリラヤは光栄を受けた。やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った」(イザヤ 9:1～2)。ガリラヤは、地理的にいつも最初に敵の侵略を受ける悲惨な場所でした。また貧しい地域でした。頑固な国粋主義者と異邦人が混在している混乱した場所でもありました。「1 日中働いても、ようやく食べるのが精一杯」、日の当たらない闇と悩みが満ちている地、それがガリラヤでした。しかしその人々の中で、イエス様は伝道を始められたのです。「もし神がおられたとしても、私のことなんか覚えていて下さるはずはない」という人々の思いのある所、そこに生きる人々に「神の国、神の恵みの支配」を経験させなさったのです。だから、それはまた、私達が神に帰りさえすれば、私達の暗い、悩んでいる心に、イエス様は来て下さるということではないでしょうか。カナダにいる時、大きな、大きな試練と悲しみを通られた後、洗礼を受けられた姉妹が、洗礼式でこう言われました。「今『恐れるな、わたしがここにいる』という語りかけを聞いています」。

「神の国」は来ています。私達がすること、それは絶えず神の赦しと愛を信じて、神の許に帰ることです。そこに答えがあるのです。